



巻頭言

深化と拡張

●
田中健太郎 Kentaro TANAKA

名古屋大学大学院理学研究科 教授、錯体化学会 会長



興味の幅は理解とともにエクスポネンシャルに広がるとの持論の下、筆者は同好の士とともに年に3, 4回、20年近く異分野の研究会を行っている。この研究会は、化学にとどまらず、物理や生物、数理（時には芸術）の研究者にも声を掛けて研究の話を伺い、その後は夜が更けるまで語らうものである。分野が違えば言語（用語）すら変わるため、考え方、アプローチ、文化などにおいて、類似点になるほどと思ひ、全く異なるところに驚きつつ、理解が進むと非常に楽しい。講演者には、以降の研究会に興味が続く限りメンバーとして参加していただく。すぐに融合研究が生まれるわけではないが、積み重ねが、現在担当しているJSPS学術システム研究センターの業務や、学会の取りまとめ、学内の学術振興にも大いに役立っている。

話は変わり、国内外の学会の数は増加しており、これは学術の先鋭化を表していると考えられる。秋の学会シーズンでは数多くの討論会が開かれ、専門分野での深い議論がなされている。筆者が所属する錯体化学会は、金属錯体をエッセンスとして無機化学、有機化学、物理化学、高分子化学、生物化学、材料科学に関わる研究者が会うプラットフォームとしても機能している。そのため多くの会員が、錯体化学会討論会が開催される9月には、同時期に催されるほかの学会との掛け持ちに大忙しである。特に若い研究者から、スケジュール調整に苦慮する声を多く聞く。関連学会とは、数年後の学会開催情報を共有しながら調整をしているものの、担当する開催校の都合や、参加のしやすさのため平日に開催することを考えると、なかなか希望どおりにはならない。錯体化学会内の議論では、時期を移して討論会を開催することや関連学会との共同開催などのアイデアが出された。共同開催ということで、以前にあった日本化学会秋季年会を思い出した。同じ会場で化学系学協会が合同開催され、連合討論会としても機能していたはずである。当時、筆者はまだ学会に参加させていただきだけの若手研究者だったため秋季年会が中止された理由を知らなかったが、本誌55巻8号に経緯が記されていた。それぞれの学協会による個別の討論会開催が増えたことによる秋季年会を運営された支部の方々のご苦労、中止の決断をされた化学会委員会の方々の慎重な議論が伝わってくる。一方で、それから20年以上が経ち、学術の多様化がさらに進み、学際研究、融合研究の必要性が増している。そのため、研究者が異なる分野から思わぬヒントを受け、深い議論を興せる機会が求められている。学術の発展には専門性の「深化」と「拡張」の両軸が必要である。20年の時を経て、学会を跨いで討論会を共同開催することによってもそれを促すことができるかもしれないため、関連学会の方々と連携を深めたい。

© 2025 The Chemical Society of Japan